

## 第4部 大仏建立と百済王敬福

——金九百両の献上そして百済寺——

第1部から第3部までは、古代朝鮮半島の情勢や百済国の歴史、そしてそのわが国との関係を見てきました。その百済国が滅亡して、わが国に来ていた王子善光をはじめとして百済王一族の人たちがわが国の歴史上いろいろな活躍をします。第4部からはその百済王家の活躍を中心として当時の歴史を振り返りたいと思います。

### 1. 平城京

百済が滅亡した660～663年の頃は、わが国では飛鳥に都がありました。律令制が進展していくと共に、国の中心としての都の機能高度化と交通の便への配慮が必要となります。そこで飛鳥から平城京への遷都が行われたのです。

#### (1) 飛鳥から平城京へ

遷都の話に進む前に飛鳥を振り返っておきましょう。韓国の扶余に旅した人は、その風景の佇まいが飛鳥に似ているのに驚かされると言います。東漢直氏をはじめ多くの渡来人が住み着いた飛鳥は、その人たちが故郷を偲ぶことのできる土地だったかも知れません。また、渡来人たちが故郷へ思いを馳せながら開拓し建設した村落は、自らの故郷の佇まいを再現させていたと言ってもよいでしょう。最近の発掘調査によって昔の姿が一層くっきりと甦りつつあり、百済と飛鳥の距離は一段と近くなっています。



#### ① 飛鳥時代

現在は明日香と書いていますが、これは万葉集でも飛鳥と共に使われていて昔から両方の標記があったのです。飛鳥をどうしてアスカと呼ぶのか、むしろアスカに飛鳥の字が当てられたのは、アスカの地に多くの鳥が飛んでいたからでしょう。そして天武15年の朱鳥改元に際して宮を飛鳥浄御原と定めたのが飛鳥の初見のようです。

明日香については、古事記の履中記の中に瑞齒別命（後の反正帝）の話があります。「瑞齒別は墨江中王を殺害した隼人の曾婆加里を計略によって誅殺し、明くる日に大和に上って行った。それでその土地を『近つ明日香』と名付ける。大和に着いた時に、『今日はこの土地に泊まり、穢れを清める禊ぎをしてから、明日参上して石上神宮を拜もう。』と言われた。それゆえ、この土地を『遠つ明日香』と名付けた——というのです。古事記をはじめ風土記などに地名の由来が多く書かれていますが、語呂合わせ的なものが殆どと言ってよいでしょう。例えば古事記崇神記の中で樟葉について、大彦命の軍の攻撃に建波邇安王の兵士たちは恐怖で身がすくみ禪のなかに糞を垂れた、それで糞禪（クソバカマ）と言ったが今では久須婆（クズハ）と呼んでいると書かれています。あまり当てになる話ではありません。

聖武天皇の妃となった光明皇后は安宿姫と言いました。安宿と書いてアスカまたはアソカと呼んだのです。宿はハングルではスクと発音しますが、田舎とか村落の意味があります。安宿は安らかに憩える田舎です。渡来の人々がこの地を望郷の思いでアンスクとかアスカと呼んだのではないのでしょうか。アスカが渡来人によって名付けられたとするなら、安宿という字を当てるのが最も相応しいのではないかと思います。

592年に崇峻天皇が蘇我馬子の命を受けた東漢直駒によって殺害されます。その後馬子の推戴を受けて推古天皇が豊浦宮に即位してから、710年に元明天皇が平城京へ遷都するまでの間、飛鳥が政治の中心地でありわが国の都だったのです。飛鳥時代を前期と後期に分けることができます。645年皇極女帝の時に、中大兄皇子や藤原鎌足が蘇我入鹿を誅殺するという乙巳の変が起こり、大化改新が行われて孝徳天皇の難波宮が開かれます。592年からこの645年の50数年を前期とします。難波宮は654年までの10年間存続しましたが、孝徳天皇崩御の後には皇極が重祚して飛鳥板蓋宮で即位します。それから710年までの50数年を後期としています。天智天皇が667年から671年の間近江に宮を移していますが、飛鳥には留守司が置かれ政治的都市の機能は存続していました。なお、694年持統天皇が開いた藤原京は飛鳥ではないとの説もあります。

推古女帝の兄であった先帝用明は磐余池辺双槻宮を都としていましたし、それまでも磐余を中心とした地域を都としていました。因みに継体大王が最後に都としたのがやはり磐余玉穂宮でした。なぜ推古は磐余を離れて飛鳥で即位したのでしょうか。蘇我馬子の力が大きかったでしょう。豊浦宮は馬子の邸宅であったと言われます。飛鳥時代前期は推古・舒明・皇極と続いていますが、それは馬子・蝦夷・入鹿と続く蘇我氏の時代でもありました。蘇我本宗家は乙巳の変で入鹿が殺害され蝦夷が自刃して果てるまで、天皇家を凌ぐ権力を誇示します。本宗家の系譜は下の通りです。

武内宿祢——蘇賀石河宿祢——満智——韓子——高麗——稲目——馬子——蝦夷——入鹿

石舞台古墳



満智は百済の高官で、応神天皇の時に渡来した木満致であるという説がありますが確かではありません。稲目は葛城家の娘と結婚しその権威を利用して権力の座に着いたとされています。稲目以前の系譜は武内宿祢につなげるために作られた架空のものと考えられていますが、韓子や高麗という名が連なっていて半島系の家系であることが想像されます。稲目には馬子・堅塩姫・小姉君の3人の子がいました。

堅塩姫・小姉君の2人は共に欽明天皇の妃となり、堅塩姫は用明・推古を生み、小姉君は崇峻と用明の妃穴穂部皇女を生んでいます。そして馬子はこれらの朝廷で大臣を務めるのです。稲目の権力の大きさが分かります。如何に葛城家の力が強かったとしても稲目の卓越した政治力がなければ、これ程天皇家に入り込むことは出来なかったでしょう。後の藤原不比等の力を思わせます。

馬子はこの稲目の力を引き継ぎ、天皇家に対して高圧的とも言える態度を示します。天皇家の外戚としての権力を行使しました。東漢直駒に命じて意に添わぬ崇峻帝を殺害していますし、姪の炊屋姫をわが国最初の女帝推古として擁立し、その推古に対して天皇家所領の葛城の地の譲渡を迫るなどの専制的な行為が目立ちます。馬子の孫の入鹿に至っては所領の民に対して自らを天皇と呼ばせたと言います。この蘇我氏の専制に対して立ち向かったのが中大兄皇子と中臣（藤原）鎌足でした。そして645年に乙巳の変が起こり入鹿は誅殺されます。

専制的な蘇我氏でしたが、この時代に中央集権的な政治が伸張しました。604年には推古の摂政聖徳太子によって17条の憲法や冠位12階が制定されています。大化改新は蝦夷・入鹿の滅亡後に実現しますが、これを推進してきたのは実は蘇我氏であったのではないかという説が有力です。文化面では仏教信仰が蘇我氏を中心に進められて、蘇我氏の氏寺法興寺（飛鳥寺）、聖徳太子による四天王寺や法隆寺、舒明・皇極による百済大寺などの建設が行われました。607年には遣隋使が初めて派遣され、この頃から国名を倭から日本に改めています。

百済の王子豊璋と善光は631年舒明天皇の時にやってきました。舒明が建てた百済宮や百済寺は二人の王子のためだったのではないのでしょうか。また義慈王に追放された翹岐一族が642年に亡命してきます。

飛鳥板蓋宮跡



飛鳥後期は斉明・天智時代と天武・持統時代に分けられます。難波宮で孝徳天皇が崩御すると、655年に皇極帝が飛鳥板蓋宮で重祚して斉明天皇となります。斉明は即位するとすぐに小墾田で大規模な新宮造営に取り掛かりました。更に斉明は多武峰に両槻宮を造営したのをはじめ、水路や池その他の構築物を次々に作っていきました。飛鳥には石造物が多く残されていますが、殆どが斉明によるものと言われています。



斉明帝の亀型石像物

斉明6年(660)9月、百済は唐・新羅の連合軍によって滅ぼされ、義慈王らは唐都長安へ連れ去られました。百済はわが国に救援を要請すると共に、王子豊璋の帰還を求めます。豊璋を王に担いで百済の復興を図ったのでした。斉明自ら九州に出兵しますが朝倉宮で崩御されます。663年、百済救援は失敗に終わり百済は完全に消滅します。称制していた中大兄皇子は668年に正式に皇位に就き、都を近江に移しました。

天智をはじめ弟の大海人皇子を皇太子としていましたが、伊賀采女に大友皇子が生まれると変心してこれを皇太子とします。天智が没すると大海人と大友の2人の間で後継者争いが起こりました。これが壬申の乱ですが、これに勝利した天武天皇は672年の末に宮を飛鳥浄御原宮に移しました。そして官人の位階昇進制度などを設けたり、庶民の任官への道を開いたりなどと政治体制の整備を進めます。681年には律令の編纂を開始しますが、686年に病没します。

689年に天武妃であった持統天皇は飛鳥浄御原令を制定します。国家体制を強化するために本格的な戸籍作りも始められました。692年には班田収授の法が制定されて公地公民制が押し進められました。こうして政治の体制を確立し天皇の権威を高めた持統は、都を藤原京に移します。政治の中心である都が本格的な都城となり京と呼ばれるのはこの藤原京が最初でした。ここでは浄御原宮で推進された中央行政組織の改革が更に進められ、租庸調の税制が整備されて律令制度の完成度が高まりました。しかしこの時に令は整備されたのですが、律は結局制定されずに終わりました。

## ② 平城京への遷都

天武の妃鸕野讃良は草壁皇子を後継者にすべく、草壁のライバルであり評判の高かった大津皇子を謀反の濡れ衣を着せて死に迫りやりますが、病弱であった草壁は天武の死後間もなくして他界してしまいます。鸕野讃良は今度は草壁の子に望みを掛けて、その子軽皇子が成長するまでの間、自らが皇位を継承します。持統天皇です。そして軽皇子が14歳になったとき譲位して文武天皇が誕生しました。

文武天皇は、持統の許で頭角を現してきた藤原不比等の娘宮子を妃に迎え、首(オビト)親王(後の聖武天皇)を生みます。しかし文武は父草壁に似て健康に優れず25歳の若さで病没します。706年、文武は病床にあって母阿閉皇女への譲位を仄めかしますが、阿閉が固く辞退しているうちに文武は崩御してしまいました。やむなく阿閉が即位して元明天皇となりました。即位に際して元明は百官の前でその即位の正当性を主張した宣命を述べました。これは皇位の父子相伝を述べ、文武からその子首親王への譲位を仄めかし、自分はその中継ぎに過ぎないことを表明したものでした。そしてこれは天智天皇によって定められた、改めることのない常の典(不改常典)であるとしたのです。

元明の即位した707年の翌年、武蔵国から銅が採れたとして献上がありました。これを寿ぎ年号を和銅と変えます。これを契機として16年に亘って築き上げた藤原宮から北方の奈良山の麓に



再建された平城京・大極殿



壮大な都を建設しようとの案が廟議によって決定されます。

元明は遷都の詔を発して次のように述べます。

「朕は徳の薄い身であるが、天を奉じて皇位を継承した。この大任を思うと、遷都を考慮する余裕などはなかった。しかし皇族・大臣らは、みな言う。昔から今にいたるまで、天の時を觀、地の相を占って、官を定め、京を営むことは、皇基を確立し、これを無窮に伝えるゆえんである。と。衆議を無視することはできぬ。また、その勸めのことばも深く切である。

「かえりみるに、京は百官の府であり国民の帰するところであって、朕一人のものではない。しかりとすれば、朕も遷都の勞を避け安逸の日を送ることはできぬ。国家の利益とあれば遠方へもおもむこう。昔、殷の王室は五たび遷って中興し、周の王室もまた三たび移って太平をもたらした。その先例にならって都を遷すこととする。

「いま平城の地は、四禽、凶に叶い、香久・耳梨・畝傍の三山を南方の鎮めとし、地相を占った結果もまためでたい。よろしく都すべきである。

「造営の予算は箇条を分かつて報告せよ。また着手は農繁期を避けて秋の収穫後とし、民が喜んで都へ集まるよう配慮しなければならぬ。計画は慎重にし、後に変更の必要を生じないようにせよ。」



平城京南方の鎮・香具山

四禽凶に叶うとは、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神が正しく東西南北に位置しているという意味で、平城はこの中国陰陽思想に合致した最良の地であると言っています。

古くから中国では天子南面と言って、天子は北を背にし南に面するものとしてきました。藤原京まではそれが実行出来ずにいたのですが、この平城京で初めてそれが現実のものとなったのです。平城という言葉も中国北魏の都に準じて付けられました。北魏は397年に建国し493年に洛陽に移るまで都を今の山西省太原に置いていましたが、そこを平城と呼んでいました。奈良の平城京は、中国の都をモデルとして建設されたのでした。「計画は慎重にし後で変更の必要がないように」とは、中国の都城のことをしっかりと研究し実施するようにと注意を促しているわけです。

こうして出来上がった平城宮は、まさに「青丹よし」の絢爛豪華なものでした。その一端を再建された奈良の平城宮跡で見ることが出来ます。そして和銅3年（710）3月、平城京への遷都が行われたのです。

### ③ 古事記と日本書紀

天武天皇は「わたしの聞き及んでいるところでは、諸家が先祖から伝え持っている帝紀と本辞とは、今ではもはや真実と違って、虚偽を加えているものも多いという。今においてその誤りを正さなかったならば、幾年も経たないうちに、言い伝えの本旨が減びてしまうだろう。それは帝紀と本辞とが、国家の行政の根本であり、天子の事業の基礎であるからだ。そこで帝紀と旧辞とが、真実のままであるかどうかを調べ、偽りの部分を取り除いたうえ、これを記述して後世に伝えようと思う。」と詔されました。これを受けて稗田阿礼という舎人が諳んじたものを太朝臣安万侶が記述したとされるのが古事記です。古事記は平城遷都があつて間もない和銅5年（712）に完成し天皇に献上されました。

古事記は宇宙の始めから書き起こして推古天皇までを3巻に収めています。上巻は神代を、中巻は神武から応神まで、下巻は仁徳から推古までと別れています。万葉仮名を用いて書かれていて、その素朴な表現に真実性が見られると言われます。

一方日本書紀は官製の歴史書で漢文で書かれており、「一書にいわく」といった注書きが多く挿入されていて、当時伝わっていた帝紀や旧辞の内容を偲ぶことが出来ます。天武の皇子である舎人親王が編纂工房を持ってまとめたこととされ、天武の事跡だけが2巻に亘ることなどから天武を顕彰す

るためのものであって、その立場から多くの粉飾がなされていると言われます。しかし、天武が指図した当初においてはそうであったかも知れませんが、天武が没して持統の時代になるとその目的は変化し、持統と藤原家を正統化し顕彰するものになりました。持統は高天原広野姫天皇と言われていて天照大神に比定されていますし、藤原家の祖先は天孫ニニギを護衛したアメノコヤネとされています。持統の孫の文武を支えたのが藤原不比等です。即ち持統と不比等の関係を神代の話に作り上げたのです。こうして不比等は持統の権威を利用しながら政界の第一人者に躍り出ました。日本書紀の影の主役は藤原不比等だったというわけです。

天武のためだったのか藤原家のためだったのか、歴史書は勝者のために書かれると言われますし、完全に客観的な歴史書は存在しないと言ってよいでしょう。この「百濟と百濟王」も日本書紀をベースにしながら、いろいろな著書から教えを受けて私なりにまとめています。従って極めて主観的なものとなっていて真実から離れたところがあるかも知れませんが、それをご理解のうえ読んで頂ければ幸いです。

## (2) 聖武天皇

奈良時代、平城京の時代で有名なのは聖武天皇です。奈良時代の天皇として聖武以外の天皇の名が思い浮かばない程、聖武は奈良時代を代表する天皇ということが出来ます。聖武の在位期間は724年から25年間ですから、奈良時代の3分の1は聖武の時代でした。

### ① 聖武と不比等

平城遷都を行った元明から譲位されて氷高皇女（元明の娘・聖武の伯母）が即位して元正天皇となりますが、首皇子が24歳となった724年2月、予定通り譲位されて聖武天皇が誕生します。それより先の716年には、藤原不比等と橘三千代の間の生まれた安宿媛（アスカヒメ）を娶りました。聖武の母は不比等と加茂比売の間に生まれた宮子であり、妃もまた不比等の娘ということになって、聖武天皇は不比等に全く頭が上らないという立場に置かれました。持統から元明・元正と続いていく中で、不改常典の法を実現するためには首皇子の即位は必然的でした。それを読み取った不比等が天皇家に接近し権力を手にして行ったのでした。これが平安時代に大きく花開く藤原氏栄光の始まりです。



天智から天武に政権が移って奈良時代は天武系の天皇が続き、光仁天皇になって天智系に戻ったというのが、今でも一般的な見方です。これは天武の妃であった持統が天武の政治を忠実に継承し、それを文武・聖武へと伝えたという面から見た考え方でした。しかし、先にも見ましたように、ここに藤原不比等が絡んでくると見方は一変します。天智と深いつながりを持って大織冠という第1級の官位を与えられた鎌足の子である不比等は、天智の娘である持統に深く結びつきました。不改常典の法を提唱したのも不比等であった可能性が濃いと考えられます。不改常典は、皇位は天智からその兄弟ではなく子によって継承されるということを宣言したものでした。言うならば天武系は認めないと云っているわけで、天智と関係のない天武系の皇子たちには皇位継承権はないと宣言したのです。これを見れば、奈良時代の天皇は天武系ではなくて天智系であるということが分かります。この見方によれば、持統以後は天智系であるということも出来るのです。

### ② 聖武の彷徨

聖武天皇は即位するとすぐに母宮子に大夫人の称号を贈る勅を発しました。これに対して長屋王

が異議を唱えます。律令制で定めた公式令に反するというのです。長屋王は天武の長子の高市皇子の子で左大臣を務めており、藤原家の権力を快からず思っていました。不比等の不備を突いた発言だったでしょうが、これが後に長屋王が失脚する原因となります。神亀4年(727)妃光明子(安宿媛)が皇子を生みましたが病弱で、よく5年に亡くなります。そこへ長屋王謀反の報が伝わりました。長屋王が密かに妖術を学び国を傾けようとしているというのです。長屋王を追求しましたが、長屋王は一切弁明せず自刃して果てました。事件の後にこれは讒言であったことが明らかになります。不比等の仕組んだ計略だったでしょう。

729年に聖武は年号を天平と改元し光明子を皇后とします。臣下の身での初めての皇后でした。天平7年頃には災害や異変が頻発し疫病が流行しました。心を悩ませた聖武は唐から帰った僧玄昉を通して仏教に近付きます。しかし、9年になると藤原不比等の4人の子や高官たちが相次いで天然痘に罹って死亡します。12年には太宰府にいた藤原広嗣が政治を批判して上表し、玄昉と吉備真備の追放を進言して反乱の兵を挙げました。聖武は大野東人を大將軍として軍を送り広嗣を誅伐させました。

広嗣討伐の最中、聖武は「朕は思うところがあって、今月(12年10月)の末よりしばらくの間、関東(伊勢・美濃より東の地)に行こうと思う。行幸に適した時期ではないが、事態が重大でやむを得ないことである。將軍らはこのことを知っても、驚いたり怪しんだりしないようにせよ。」と詔して、東国への行幸を始められます。聖武帝彷徨の始まりです。東国各地を行幸した後12月15日に聖武は恭仁宮に着かれてここを都と定め、都城の造営に取り掛かりました。翌13年(741)正月はこの恭仁宮で朝賀を受けられます。

聖武はこの後紫香楽宮を造営し、そこで不審火に悩まされると難波宮に移り、出発から5年経ってやっと平城京に戻ります。聖武はどのような心境だったのでしょうか。藤原家に取り囲まれて鬱屈した日常を送り、事件が相次いだ上に天然災害が頻発してかなりの心痛だったでしょう。広嗣の反乱で命を狙われる危険も感じられたかも知れません。ノイローゼ気味となって都を逃げ出したかったのでしょうか。大事な広嗣討伐の時期であったにも拘わらず、逃げたい一心が強かったのではないのでしょうか。恭仁宮はそんな煩わしさから解放される場所でした。しかし天皇としての現実はずぐに後を追って来ます。そして次々に都を変えますが遂に元に戻らざるを得ませんでした。

### (3) 大仏建立発願

#### ① 発願の詔

天平13年正月に恭仁宮において朝賀を受けた聖武は、その3月に全国に七重塔を持つ国分寺と国分尼寺を設けるよう詔を発します。「神聖な仏の法が盛んになって、天地と共に永く伝わり、四天王の擁護の恵みを、死者にも生者にも行きとどかせ、常に充分であることを願うためである。」と言っています。現在にも残る国分寺や国分寺跡はこうして聖武の詔によって誕生したものでした。

次いで天平15年(743)10月に次のように詔されます。これが盧舎那仏造営(大仏建立)の詔で、少し長いですが全文を掲載しておきたいと思います。

「朕は徳の薄い身でありながら、かたじけなくも天皇の位をうけつぎ、その志は広く人民を救うことにあり、努めて人々をいつくしんできた。国土の果てまで、すでに思いやりとなさけ深い恩恵をうけているけれども、天下のもの一切がすべて仏の法恩に浴しているとはいえない。そこで本当に三宝(仏法僧)の威光と靈力に頼って、天地共に安泰になり、よろず代までの幸せを願う事業を行って、生きとし生けるもの悉く栄えんことを望むものである。

「ここに天平15年、天を12年で一周する木星が癸未(みずのとひつじ)に宿る10月15日を以て、菩薩の大願を発して、盧舎那仏の金銅造一体をお造りすることとする。国中の銅を尽くして像を鑄造し、大きな山を削って仏堂を構築し、広く仏法を全宇宙にひろめ、これを朕の知識(仏に協力する者)としよう。そして最後には朕も衆生も皆同じように仏の功德を蒙り、共に仏道の悟り

を開く境地に至ろう。

「天下の富を所持する者は朕である。天下の権勢を所持する者も朕である。この富と権勢をもってこの尊像を造るのは、ことは成りやすいが、その願いを成就することは難しい。ただ徒に人々を苦勞させることがあつては、この仕事の神聖な意義を感じるができなくなり、あるいはそしりを生じて、却つて罪におちいることを恐れる。したがつてこの事業に参加する者は心からなる至誠をもって、それぞれが大きな福を招くように、毎日三度盧舎那仏を拝し、自らがその思いをもって、それぞれ盧舎那仏に従うようにせよ。もし更に一枝の草や一握りの土のような僅かなものでも捧げて、この造仏の仕事に協力したいと願う者があれば、欲するままにこれを許そう。国・郡などの役人はこの造仏のために、人民の暮らしを侵しみだしたり、無理に物資を取り立てたりすることがあつてはならぬ。国内の遠近にかかわらず、あまねくこの詔を布告して、朕の意向を知らしめよ。」

そして10月19日に紫香樂宮に行き、盧舎那仏の像を造るため甲賀寺の寺地を開きます。後にそこで体骨柱を建てます。大仏の建立はこのように最初は紫香樂宮において始まったのでした。それにしても、この詔の力強さはノイローゼの聖武帝のものとはとても思えません。富も権勢も朕のものと言ふ聖武には生まれ変わったように力があります。精一杯力んで見せたのでしょうか。それとも実は本来強い天皇だったのでしょか。真実は分かりませんが、大仏建立に強い意欲があつたことを窺わせます。

## ② 知識寺

この詔の中に知識という言葉が出てきますが、仏に協力する者との意味です。聖武は天平12年10月から東国への行幸を始めますが、この年の2月に難波に行幸、河内の知識寺を訪問されます。知識寺は信徒の財物や労力の寄進によって造営された寺院を言いますが、河内の知識寺は塑像の大仏盧舎那仏を安置し規模の大きさでよく知られていたようです。柏原市太平寺にある石神社の辺りが知識寺の跡と言われ、白鳳期の瓦や伽藍配置の跡が発掘されており、また石神社の手水石は東塔の塔心礎石とされています。



この大仏を見た聖武は自らも盧舎那仏建立を思い付かれたと続日本紀に書かれています。天平勝宝元年12月に宇佐八幡宮の禰宜尼杜女が東大寺に参詣した時、孝謙天皇・聖武太上天皇・皇太后（光明子）も行幸され、その席で左大臣橘諸兄が聖武帝の詔をうけたまわつて禰宜尼たちに次のように申しあげました。「去る辰年（天平12年）河内国大県郡の知識寺においでになり、盧舎那仏を拝み奉つて、朕もお造り申しあげようと思つた・・・」知識によって大仏を建立するという考えをこの時から温められたようです。

河内知識寺の盧舎那仏は平安時代にも「和太・河二・近三」と呼ばれて有名でした。大和の東大寺の大仏が一番、河内の知識寺が二番、近江の関寺が三番というのです。大仏とはどの大きさをいふのでしょうか。仏さまの身長は1丈6尺（4.8メートル）だったそうで、それに合わせた高さの仏像を丈六仏と言います。それ以上の高さの仏像が大仏です。坐像では高さが半分の2.4メートルになります。聖武帝は天下の財も権勢も自分のものであり、知識寺に負けない大きさの仏像を造ろう、塑像ではなく金銅のものを、大和や河内の範囲の知識ではなく全国の知識を結集しようと決心されたのでしょか。

## ③ 行基

全国の知識結集に当たつて聖武が目をつけたのが行基でした。行基は百濟から渡来した王仁博士



を祖とする西文（カワチノフミ）氏一族の高志才智を父として、天智7年（668）に河内国大鳥郡（堺市）で生まれました。681年に出家し、集団をつくって貧民救済や水利・架橋などの社会事業に活躍します。生家を家原寺としてそこに居住し布教活動を展開しますが、民衆の味方で危険人物と見なされ、寺外の活動は「僧尼令」違反であるとの理由で弾圧を受けます。しかし行基の活動は民衆の強い支持を受けて益々発展し、朝廷も遂にその実力を認めてかえって行基を利用するようになります。行基の開いた寺院は数多くあり樟葉の久修園院もその一つで、神亀2年（725）行基58歳の時に創建したと伝えられています。行基が事業を始めると群衆が集まってきて協力し、事業は瞬く間に完成したと言われる程、行基の人望は高かったのです。



天平13年（741）74歳になっていた行基が恭仁京に近い木津川に泉橋を架けていた時、聖武はわざわざ行基を訪ねて勅願寺出雲阿弥陀寺の建立を依頼されていますが、大仏建立を発願されると、民衆を動員する行基の力を評価していた聖武はその力を利用しようとされます。行基は聖武の求めに応じて紫香樂で寺域の縄張りなどに立ち会った後、勧進のため全国各地へ行脚を行いました。この勧進の効果は大きく、天平17年（745）に行基は日本最初の大僧正の位を贈られます。しかし莫大な費用を要した大仏建設はこうした勧進だけでは不十分であって、聖武は自分の生存中には完成しないであろうと思われて、娘の阿閉内親王（孝謙帝）に「来世にまた生まれかわってでも、造り続けよう」と言われたといひます。また聖武の考えに反して「東大寺造って人民苦辛す」（橘奈良麻呂の言）という状況が各地で起こっていたのも事実でしょう。

天平13年（741）74歳になっていた行基が恭仁京に近い木津川に泉橋を架けていた時、聖武はわざわざ行基を訪ねて勅願寺出雲阿弥陀寺の建立を依頼されていますが、大仏建立を発願されると、民衆を動員する行基の力を評価していた聖武はその力を利用しようとされます。行基は聖武の求めに応じて紫香樂で寺域の縄張りなどに立ち会った後、勧進のため全国各地へ行脚を行いました。この勧進の効果は大きく、天平17年（745）に行基は日本最初の大僧正の位を贈られます。しかし莫大な費用を要した大仏建設はこうした勧進だけでは不十分であって、聖武は自分の生存中には完成しないであろうと思われて、娘の阿閉内親王（孝謙帝）に「来世にまた生まれかわってでも、造り続けよう」と言われたといひます。また聖武の考えに反して「東大寺造って人民苦辛す」（橘奈良麻呂の言）という状況が各地で起こっていたのも事実でしょう。

## 2. 大仏建立

### (1) 建立の過程

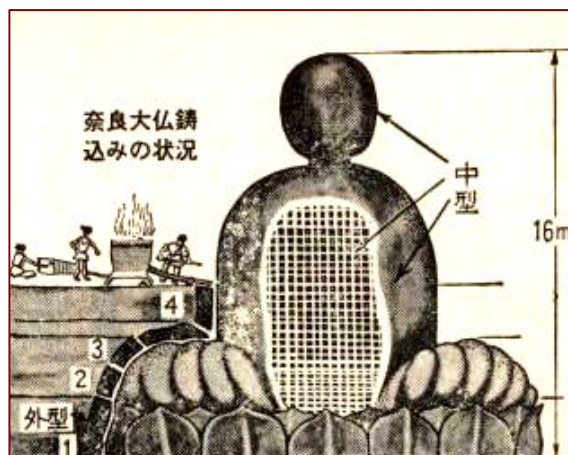
#### ① 紫香樂から平城京へ

恭仁宮や紫香樂宮は重臣たちからも庶民からもたいへん評判の悪いものでした。天平17年5月2日、諸官の官人たちを召集してどこを都とするのがよいかを聞いたところ、皆平城を都にするのがよいと言上しました。この頃地震が多発して人々は大きな不安の中にありましたので、恭仁京の市人たちは先を争って平城京へと向かい、早朝から夜更けまで行列は絶えることがなかったといひます。5月11日になって聖武は行幸という形でやっと平城京へ戻られました。

都が平城京に戻ると、大和国分寺の金光明寺において大仏建立が再開されることになりました。金光明寺は元は金鐘寺という山寺でしたが、聖武帝の国分寺建設の詔に応じて再建され、大仏建立の仏師として活躍した国中連公麻呂がこの事業に携わっていました。現在の東大寺があるところがその場所に当たります。天平17年8月23日、聖武は自ら袖に土を入れて運び、貴族・高官もこれにならって土を運んで基壇を突き固めました。

#### ② 大仏鑄造

高さ17メートルに及ぶ大仏の鑄造はたいへんな技術と労力を要するものでした。先ず像の背骨となる支柱を立て、それに縦横に木枠を組み込んで形を整え、それを荒縄で巻き上げ、その上に粘土を塗り込めて、原型の塑像を作り上げます。この原型を造るだけで1



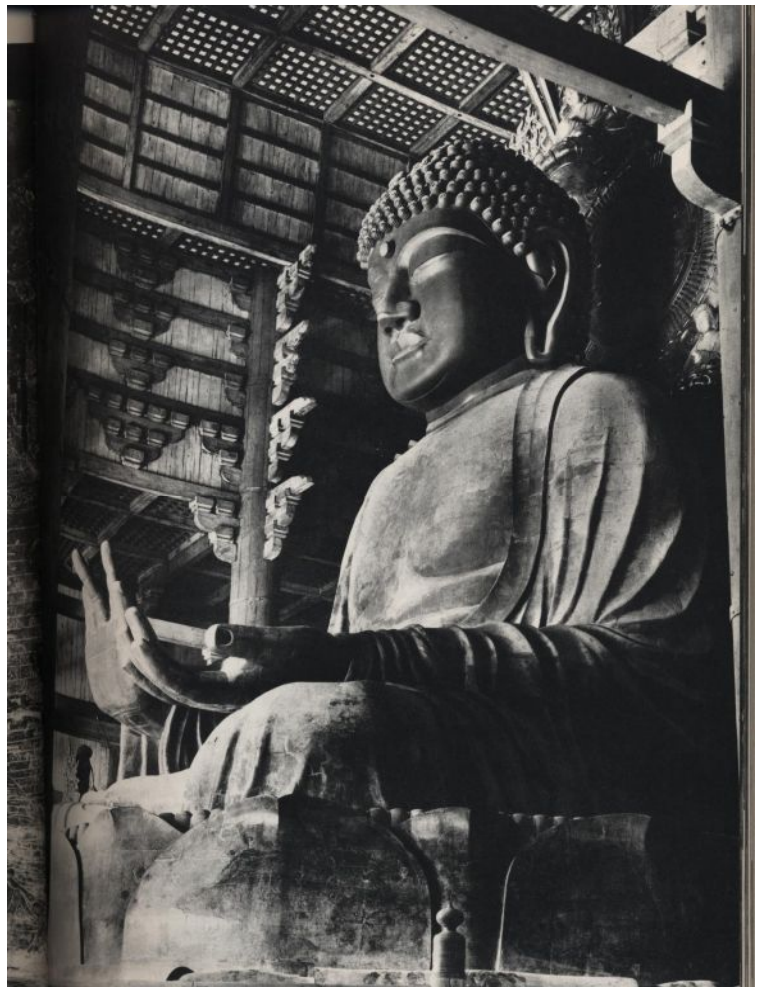


年2ヶ月を要し天平18年（746）10月に完成しています。

続いて原型から鑄型の外枠を作り、原型を削って中型とし、中型と外枠の間に溶かした銅を流し込んで像の形を仕上げていくのです。塑像の周りに土を盛り上げて銅を溶かす溶解炉の土台を作り、その上に塑像を取り囲んで溶解炉を一定の間隔で配置します。背の高い塑像ですから、下の方から少しずつ鑄込んでいって全体を8回に分けて行われたのでした。炉は1度に約1トンの銅を溶解するとしても、連座だけでも推定130トンの銅が使われていますから、それだけで130基の溶解炉が必要ということになります。すべての炉で銅が溶解したことを確認して一斉に外枠と中型の間に注入します。この作業を8度繰り返して銅像の形が出来上がります。その後、完全に鑄込まれていない不良箇所などを補修し、表面に磨きを掛けて平らにし、天平勝宝元年（749）12月に2年余の歳月を掛けた鑄込みが完成します。

### ③ 大仏師国中連公麻呂

この大仏建立の總指揮に当たったのが大仏師国中連公麻呂でした。鑄造を担当した人たちとしては大鑄師の高市大國・高市真麻呂・柿本小玉などの名があります。公麻呂の祖父国骨富は、百済の大佐平国弁成の一族で、663年の白村江の敗戦後に日本に亡命帰化し、大和国葛下郡国中村に住んでいました。公麻呂が仏師としての技術をどのようにして身に付けたのか定かではありませんが、造形感覚において際立った才能を持っていたものと思われます。仏像の命は顔にあると言われますが、これを見事に完成させた技能を高く評価された聖武帝は、公麻呂に国中連の姓を賜り、従四位下造東大寺司次官の高位官職を与えています。今の東大寺大仏は江戸期に再生されたものですから、創建当時の顔とは異なるものですが、恐らく昔のものをイメージして作られたでしょうから、公麻呂の仕事进行を想像することは出来るものと思います。



大仏殿の建立を指揮したのは大工の猪名部百世でした。猪名部氏はいつの頃か百済からわが朝廷に献上された木工職人の子孫とされ、伊勢国員弁（イナベ）に定住していたと言います。

このようにして大仏も大仏殿も、百済からの技術者によって完成しました。資金を調達したのがこれまた百済人の末裔行基であったことを合わせ考えると、百済人無くして東大寺は無かったと言えるのではないのでしょうか。

## （2）陸奥守百済王敬福

### ① 仕上げの金

銅の鑄込みが完成に近づいた頃、聖武は大仏造像の仕上げに用いる金が足りないことを心配して

いました。当時銅は708年に武蔵国から献上されて国産が進められていますが、金の産出は無く輸入に頼っていました。あまりにも大きな盧舎那仏像ですから恐らくどれくらいの金が必要なのか見当がつかなかったのではないかと思います。

仕上げの金はどれくらい必要だったのでしょうか。平安時代に書かれた延暦僧録によりますと、体表（表面積）が5,740平方尺で約527平方メートルとなります。鍍金に使った金は4,187両と出ています。1両は約15グラムですからこれを換算しますと約62.8キログラムになります。そもそも大仏の大きさはどれくらいだったか、延暦僧録その他の記録では次のようになっています。

・像高	52.40尺	(172.92cm)
・面長	16.00	(52.80)
・膝幅	39.00	(128.70)
・連座高	10.00	(33.00)
・連座外周	195.70	(645.81)

そして、仏体重量は推定で250トン、連座の重量は130トンという巨大さでした。金の手当を怠っていたとは考えられませんし多少の準備はあったのでしょうか、銅像の完成が近づいて初めてその巨大さを知り、金の不足に気が付いたのではないのでしょうか。

## ② 陸奥守

悩める聖武に金を献上したのが陸奥守百済王敬福でした。百済王敬福は、半島で百済が滅亡したとき人質としてわが国にいた王子善光の曾孫に当たります。善光一昌成一郎眞一敬福と続きます。敬福は738年41歳従六位の時に陸奥介に任じられます。陸奥守は大野東人でした。翌739年に従五位下に昇進し、743年に陸奥守になります。746年4月に上総守に転じますが9月にはまた陸奥守に戻り従五位上に昇進します。

この短期間の転任は何か事情があったものと推察できますが、恐らく渤海使節への対応問題だったでしょう。渤海使節の渡来は727年が最初で、第2回は739年に出羽（能代）に漂着、第3回は752年で佐渡に漂着しています。739年から752年まで13年の期間がありますが、この間にもいろいろな動きがあったことは容易に想像出来ます。出羽に着いた使節は陸奥の多賀城を経由して上総に至り、ここから海路を西へと向かい伊勢から陸路を奈良へと向かいました。この上総での接遇などについて渤海から注文が付けられたのではないのでしょうか。蝦夷対策と共に渤海対策をも担っていた敬福が、この問題解決のために一時的に上総守に任じられたものと思われます。

この敬福が、多賀城の北方にある小田郡涌谷で砂金が採れそれを聖武に献上することになります。恐らく涌谷だけでなく蝦夷の地のあちこちで金が採れたのではないのでしょうか。聖武は献上された九百両の金だけでは足りないを見るとすぐに、陸奥国に調・庸を3年間免除、小田郡には更に長期に亘って免除されますが、それは金の採取に当たらせるためでした。この処置は金の採取地が涌谷だけでなかったことを表しています。

## ③ 金九百両献上

大仏の仕上げに必要な金は4,187両（62.8キログラム）でした。900両（13.5キログラム）というのは必要量の約21.5パーセントです。仏像を完成させるにはまだまだ多量の金を必要としたわけですが、全く手立てが無さそうだったところに献上されたのですから、聖武の喜びはどのようなものだったのでしょうか。

749年2月22日、百済王敬福は陸奥介佐伯全成らを遣わして金九百両を献上しました。続日本紀には2月22日に「陸奥国からはじめて黄金を買進した。そこで幣帛を奉って畿内・七道の諸社にそのことを報告した。」とあり、4月1日、聖武帝は東大寺に行幸され、左大臣橋諸兄を遣わ

して次のように宣命され、年号を天平感宝と改めます。

「三宝の奴としてお仕え申し上げている天皇の大命として、盧舎那仏の御前に申し上げよう、と仰せられます。この大倭国では天地の開闢以来、黄金は他国より献上することはあっても、この国にはないものと思っていたところ、統治している国内の東方の陸奥国の国守である従五位上の百済王敬福が、管内の小田郡に黄金が出ましたと申し献上してきました。これを聞いて天皇は驚き喜び喜んで思われるに、これは盧舎那仏がお恵みくださり、祝賀して頂いた物であると思ひ、受け賜わり畏まっていただき、百官の役人たちを率いて礼拝してお仕えすることを、口に出すのも恐れ多い三宝の御前に、かしこまりかしこまって申し上げますと、申します。」

更に重複したように「4月22日、陸奥守・従三位の百済王敬福は黄金九百両を貢進した。」とあります。敬福は金を献上した功績によって聖武帝が東大寺へ行幸された4月1日に、従五位上から従三位へと7階級飛んでの昇進をしています。従って4月22日の貢進というのは、従三位への昇進後に金献上の公的な儀式が行われたのでしょう。百官の居並ぶ前での榮譽を敬福が与えられたものと思われる。

5月11日には金献上の関係者に対する昇進や褒賞が行われました。従五位下の陸奥介佐伯全成と鎮守判官大野阿朝臣横刀は従五位に、金の出た山の神主



黄金山神社

(黄金山神社の神主) 日下部深淵には外少初位下を授けるなどされました。この神社は一地方神社でしたが、この産金の縁起により黄金山神社となり延喜式内社になりました。

歌人の大伴家持は産金を寿ぎ次のような歌をささげています。

すめろぎの 御世栄えんと 東なる みちのく山に 黄金花咲く  
(須売呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知乃久夜麻尔 金花佐久)

大仏建立完成の目途がついた聖武は、娘の阿閉内親王に皇位を譲り孝謙天皇が誕生します。年号は天平勝宝となりました。それにしても銅像が出来上がった絶好のタイミングで金が献上されたというのは、仏師國中連公麻呂と敬福との人間関係に大きな理由があると思います。百済というのがそのキーワードでしょう。百済王家の人間であるにも拘わらず、豪放磊落な敬福の人柄は百済の亡命者たちの中で信頼されていたと思います。恐らく公麻呂は金が不足していることを早くから気付いていた筈です。それを早くから持ち出さなかったのは仕事の手順ということもありますが、敬福の功績を最大限に生かすタイミングを計っていたのではないのでしょうか。

### 3. 百済王敬福と百済寺

#### (1) 河内国交野郡

##### ① 宮内卿兼河内守

従三位に昇進した百済王敬福は翌年の天平勝宝2年(750)に宮内卿に任じられます。律令制によって官8省(中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内)が定められましたが、その一つ宮内省の長官です。地方の行政官から朝廷内部の高官へと昇進したのです。兼務となった河内守には何時就任したかは記録が無く定かではありません。敬福が天平神護2年(766)6月28日に薨じたときの記録が続日本紀にあります。その中で「・・・宮内卿に転任させ、間もなく河内守を兼任させ、」と書かれていますので、宮内卿になってからすぐに何かの事情で河内守を兼任させられたことが窺えます。



その事情については次のようなことが考えられるのです。敬福が宮内卿に任じられたのは750年5月14日でしたが、10日後の5月24日に「京中ににわか雨が降り、川の水が溢れ出た。また河内の伎人（クレ）堤・茨田（マンダ）堤などが所々決壊した。」とあります。堤が決壊して恐らく河内や難波の河内湖に面した地域が洪水で大きな被害を受けたものと思われます。百済の人たちが住み着いた百済郡も例外ではなかったでしょう。平城京にいたと思われる敬福のところに救援依頼が届いたでしょう。朝廷はこれに応じて丘陵で水害の無い河内国交野郡に移住するよう配慮し、その名目を付けるために敬福を河内守に任命したのだと推測されます。あくまでも私見ですが、「聖武帝は特に敬福を寵愛されて、恩賞や賜り物が多かった」と続日本紀に記されており、そして河内守任命の記録がないということは、聖武の独断的な措置であったような気がするのです。なお、この移住の後百済郡はすっかり寂れてしまったようですから、単に人々が移住していったというだけでなく、洪水によって甚大な被害を受けたことが想像されます。

## ② 交野郡

こうして百済王一族をはじめ多くの人々が難波国百済郡から河内国交野郡に移りました。それが現在の枚方市中宮で、百済王神社や百済寺跡公園から常翔啓光学園・明倫小学校そして中宮第1団地に掛けての一带でした。ここは百済王一族が移転してくる前からかなり開かれていた地域で、交野郡の郡家があったのではないかと想像することも出来ます。（一般的には交野市郡津が郡家のあった場所と考えられています。）敬福はその移住に際して百済郡にあった住居を交野郡へと移転させたでしょうが、宮内卿という要職にある身としては当然平城京に住んでいたでしょうから、恐らく交野へは移住しなかったでしょう。



百済寺跡公園

交野郡は現在の交野市の市域だけでなくもっと広い地域でした。現在の枚方市の範囲は、元は河内国茨田郡に含まれていましたが、大宝2年（702）に茨田郡から交野郡が分離されて茨田郡と交野郡にまたがることになりました。おおよそ天野川から北が交野郡、南が茨田郡であったと見てよいでしょう。現在の天野川は堤が整備されて天井川になっていますが、むかしは幅広く蛇行しながら流れていたと思われます。従って今の天野川の北や南といってもちょっとイメージが違うかも知れません。

郡の中に里（郷）が置かれましたが、交野郡の郷は、三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉の6つでした。三宅郷は交野市倉治から星田へかけての地、田宮郷は枚方市田宮から茄子作、山田郷は中宮・田口方面、葛葉は船橋川以北の楠葉です。岡本郷と園田郷は場所が不明ですが、津田・長尾方面と牧野・招提方面と考えられています。田宮・茄子作は天野川の南ですから交野郡に入るのはおかしいと思われませんが、天野川の流れの変化と考えればよいのではないのでしょうか。

交野郡中宮の地は交野台地が淀川に突き出すように伸びている突端に位置しています。大阪湾から淀川を遡ってくると、真っ先に目に飛び込んでくるのが枚方台地の万年寺山であり、天野川を挟んで対岸に位置するのが中宮の地です。ここに大きな建物があつたならきっと目立った存在だったと思います。聖武がこの地を与えたのか敬福が選んで所望したのか分かりませんが、武将として大きな活躍をした敬福にとって、日本全国をにらみ朝鮮半島をにらむためには絶好の位置だったと思われれます。

## (2) 百濟寺建立

### ① 百濟寺

難波の百濟郡にも百濟寺があったのですが、河内交野郡での百濟寺建設は敬福にとって一大事業だったのではないのでしょうか。宮内卿という朝廷の中枢にあって聖武の厚遇を得ていた敬福には、その氏寺建設に当たって聖武の大きなバックアップがあったに相異ありません。敬福は河内国守に就任し一族が交野郡に移住するとすぐに氏寺の建設を発願しました。東大寺の大仏の鑄造が終わってすぐにその技術を利用しようとしたと思います。金を献上した敬福としては当然の発想だったでしょう。近年の発掘調査から規模は小さいものの、朝廷の発願によって建設される官寺に準じた極めて程度の高い施工がなされていたことが分かってきています。金堂に安置された本尊が釈迦如来であったかどうかは分かりません。発掘された大型多尊せん仏は釈迦三尊を中心としていますが、本尊は半島で信仰の厚い弥勒菩薩ではなかったかと想像しています。

東大寺での鑄造技術も活用されたということは、百濟寺では寺域内に修理院があり鑄造工房が設置されていたことによって想像できます。大仏建立に当たって銅の鑄込みのために数多くの溶解炉が設置されていますが、その炉の幾つかがここに再利用されたのではないかとの推測も出来ます。百濟亡命者の子孫である国中連公麻呂の助力もあったのではないのでしょうか。

### ② 国指定特別史跡「百濟寺跡」

百濟寺はこうして百濟王氏の氏寺として建設され、百濟王氏の隆昌のシンボリックな存在として、桓武天皇や嵯峨天皇の交野行幸時にはここが饗応の舞台となったのでした。この百濟寺が百濟王氏の没落と共に消滅してしまいます。どうした理由かは分かりませんが、恐らく維持が困難となって自然消滅したのではないのでしょうか。しかし、その寺跡が奇跡的にそのまま保存されていました。

以下、枚方市教育委員会・(財)枚方市文化財研究調査会の資料に基づいて、発掘調査や保存などの状況について説明します。

昭和7年(1932)年に大阪府史跡調査委員会が調査したところ、薬師寺式の伽藍配置で主要な堂塔の遺構がよく残されていることが明らかとなりました。特に柱の礎石の遺存率が全国的に見ても屈指のものであるところから、昭和16年(1941)に寺域一帯が史蹟に指定され、昭和27年(1952)には、造営氏族がはっきりしている数少ない寺院であり、百濟王氏の歴史的背景と相俟って、日本古代史における日朝文化交流の史実を徴証する遺跡として特別史跡に指定されたのです。

このように特別史跡の指定を受けながらも、その後は放置されて立ち入ることも出来ない状態になってしまっていました。これを憂いた当時の枚方市長寺島宗一郎氏が、ここを市民が親しめる史蹟公園として整備することを提案し、これを受けて大阪府教育委員会は文化財保護委員会記念物課と協議を重ね、昭和40年(1965)に公園計画策定の資料を得るための発掘調査を実施しました。そして42年までの2ヶ年をかけて、主要伽藍の基壇の地上立体表示と周囲の緑陰形成を中心とする整備事業が実施されました。この整備事業は、国庫補助事業による史跡整備としてはわが国最初の事例となっています。こうして整備された百濟寺跡は史蹟公園としての風格を深め、枚方八景の一つ「百濟寺跡の松風」として指定されています。

しかしながら整備後40年以上経って、施設が老朽化して破損変形が生じており、史跡保存と活用についての最近のさまざまな進展にも対応する再整備が必要になってきました。そして文化庁・大阪府教育委員会の指導のもとに再整備事業に着手し、日韓文化交流史のシンボルと位置付けて、





日韓友好の広場として活用していくことが目指されています。この再整備事業のための発掘調査が平成17年（2005）から実施されており、百済寺の特色が次々の明らかにされてきました。

特筆されるものとしては、寺院地内を構成する地下遺構が大へん良く保存されており、現在分かっている伽藍造営以前に遡る掘立柱建物跡も存在することが確認されたこと、築地大垣や整然と区画された付属院地の存在が明らかになったことなどでしょう。大型せん仏や冶金工房などの個別的な発見もさることながら、百済寺は地方寺院や氏寺の造営が規制されていた8世紀中頃に伽藍が整えられており、別格的な存在であったことが確認されました。規模こそ小さいものの礎石・基壇化粧など、当時の官寺に見られる最高の技術を駆使して造営されており、四面に築地大垣をめぐるし、堂塔院を取り囲む付属院地も整然としていて、京師の寺院と比較しても遜色のないものであることが分かったのです。このように堂塔院に加えて付属院地の様相までも具体的に把握できる例は極めて稀であり、京師外の氏寺では唯一のものと言えます。



発掘の進む都度新しい発見があるこの百済寺跡、更に周辺部の調査が進めば、これまであまり明らかでなかった古代寺院の構造と経営の実態に迫ることが出来、再整備計画にも反映されて、素晴らしい百済寺跡公園が実現するものと期待されます。

### ③ 敬福の事跡

敬福は数々の事跡を残して766年に亡くなりますが、続日本紀は敬福についてまとまった伝記を紹介しています。百済と百済王敬福を顧みるのに参考となりますので、これをそのまま掲載したいと思います。

「6月28日 刑部卿・従三位の百済王敬福が薨じた。その先祖は百済国の義慈王より出ている。高市岡本宮で天下を治められた天皇（舒明）の御世に、義慈王はその子の豊璋王と禅広（善光）王を日本に遣わして、天皇の側近に侍らせた。後岡本朝廷（斉明朝）に及んで、義慈王は戦いに敗れて唐に降伏した。その臣下の佐平福信はよく国家を再建し、遠く日本から豊璋を迎え、絶えていた王位を再興した。豊璋は王位をついだ後、讒言にもとづいて無道に福信を殺した。唐兵はこれを聞いてまた州柔（周留）を攻撃した。豊璋は日本の救援の兵と共に防戦したが、救援軍は戦いに敗れ、豊璋は船に乗って高麗に遁れた。禅広はそのため百済に帰らなかった。藤原の朝廷（持統朝）は禅広に百済王という称号（氏姓）を賜り、没後に正広参（冠位48階の第6位。正三位相当）を賜った。禅広の子の昌成は、幼少の時、父に従って日本に入朝し、父より先に没した。飛鳥浄御原の御世（天武朝）に小紫（天智朝の冠位26階の第6位。従三位相当）を贈られた。

「昌成の子の郎虞は奈良の朝廷で従四位下・摂津亮になった。敬福はその第3子である。敬福の性格は気ままで規則にとらわれず、大へん酒食を好んだ。感神聖武皇帝は特に寵愛に待遇を加えられ、恩賞や賜り物が多かった。敬福は官人や人民がやってきて、清貧のことを告げる者がいると、その度、他人の者を借りて望外の物を与えた。このためしばしば地方官に任ぜられても、家にゆとりの財産がなかった。しかしその性分は物わかりがよく、政治の力量があった。天平年中に従五位上・陸奥守になった。当時、聖武皇帝は盧舎那仏の銅像を造り、鑄造は終わっていたが、鍍金の黄金が足りなかった。ところが陸奥国から駅馬をはせて、陸奥國小田郡から出土した黄金九百両を貢上し

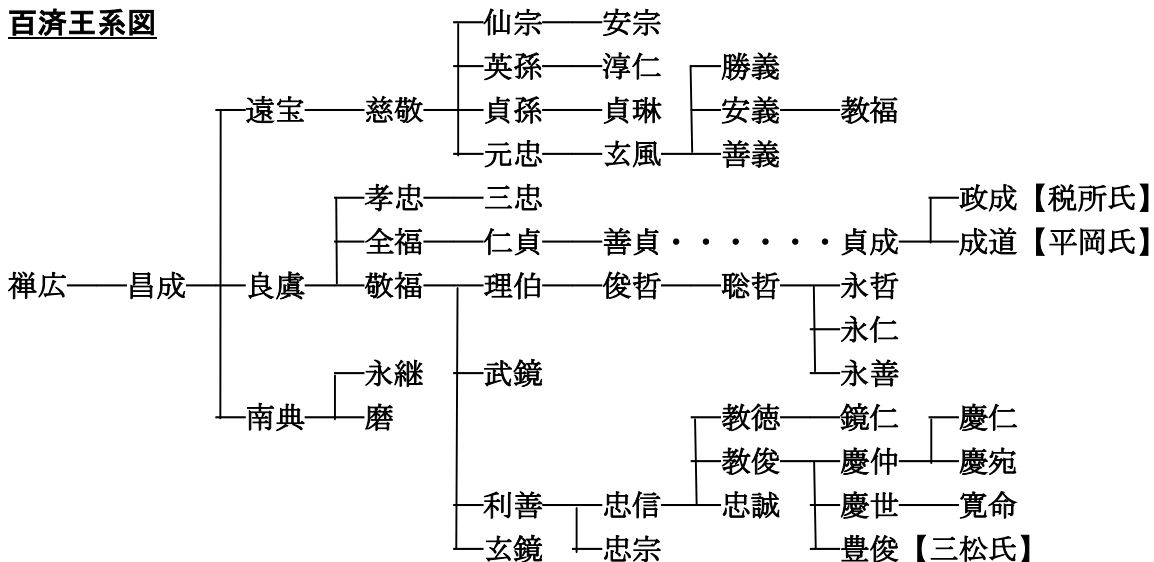


た。わが国で黄金が出たのはこの時に始まった。聖武皇帝は大いに喜んでほめたたえ従三位を授け、宮内卿に転任させ、間もなく河内守を兼任させ、天平勝宝4年、常陸守に任じ、左大弁に遷った。つぎつぎ出雲・讃岐・伊予などの国守を経て、天平神護のはじめ刑部卿に任じられ、薨じた時は69歳であった。」

ところで敬福のこの事跡の中で、天平宝字5年（761）に任命された南海節度使の経歴が脱落しています。この年、新羅征伐の議が起こり東海・西海・南海の3節度使を任命していますが、南海節度使は、紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防の12ヶ国の軍事権を掌握するという大きな権限を持った職です。実際には新羅との戦いは起こりませんでした。もし起こっていたとすれば滅亡した祖国百済のために独立戦争を戦うことになったかも知れません。そしてまた新羅に勝利していたとすれば、敬福が百済の王として君臨することになったかも知れないのです。

天平宝字7年（763）には淳仁天皇を担いだ藤原仲麻呂の乱が起こりますが、敬福は外衛大将として淳仁幽閉の役目を引き受けます。淳仁が淡路へ廃流となり孝謙が重祚して称徳天皇となります。天平神護元年（765）称徳の紀伊国行幸に際しては騎馬將軍として護衛に当たります。このようにして生涯に亘っていろいろと活躍した敬福は766年に亡くなったのです。

ここで百済王氏の系図をまとめておきましょう。



## 4. 平城から平安へ

### (1) 奈良時代の終焉

#### ① 孝謙・称徳の時代

孝謙（称徳）は女帝として独身でしたから、直系の皇太子を立てることが出来ませんでした。聖武には皇子が無かったわけではありませんでした。しかし、皇后光明子との間に生まれた基親王は生後間もなく皇太子に立てられたものの1歳の誕生日前に夭折しており、夫人の県犬飼広刀自との間に生まれた安積親王は、恭仁京において17歳で亡くなっています。聖武帝一行が恭仁京から難波宮に赴く途中、脚気を患った安積親王は恭仁京に引き返すのですが、そこで病没してしまいます。恭仁京の留守役を務めていた藤原仲麻呂が毒殺したのではないかとされます。こうして男子の後継者を失った聖武は、749年7月、金が献上されて大仏建立の成功に目途が着いたのを機会に、帝の唯一の子となった阿閉内親王に譲位して孝謙天皇が誕生したのでした。

皇位継承の見通しが立たないとなると、孝謙に代わる天皇を求める動きが活発化し貴族高官たちが暗躍します。特に紫微中台（皇后宮）長官であった藤原仲麻呂（光明子の甥）が権勢を強め、橘奈良麻呂らの勢力を排して舎人親王の子大炊王を皇太子に立てます。そして天平宝字2年（758）孝謙が大炊王に譲位して淳仁天皇が誕生します。

孝謙は大炊王の即位を心から望んでいなかったようで、光明皇太后が760年7月に崩御すると、仲麻呂・淳仁との間に不和が生じます。孝謙上皇が病気となりその治癒に当たった弓削氏の僧道鏡が、孝謙から寵愛を受けるようになりました。その道鏡を退けるよう忠告した仲麻呂・淳仁と孝謙は決定的な対立関係になります。遂に両者の間に戦闘が起こり、仲麻呂は近江国に逃走しますが9月13日に殺害されてしまいます。淳仁は廃され淡路公として流刑されました。この時、百済王敬福は外衛大将として大活躍をしています。淳仁はその後淡路で変死します。淳仁廃位によって孝謙が重祚し称徳天皇となります。そして10月称徳は道鏡を太政大臣に任じ、更に766年10月には海龍王寺で仏舎利が出現したとして道教を法王に立て、天皇称徳と法王道鏡2人による政治が継続していくことになりました。

769年、太宰府の主神（カンヅカサ）である中臣習宜阿曾麻呂が道鏡に媚びて、宇佐八幡宮のお告げであると偽って「道鏡を皇位に即ければ天下は太平になるだろう」と告げました。道鏡はこれを聞いて大喜びし自信を深めます。称徳帝は和氣清麻呂を招いて「夢の中に八幡神の使いが来て『大神は天皇に奏上することがあるので、尼の法均を遣わされることを願っています』と告げた。そなたは法均に代わって神託を聞いてくるように」と勅します。清麻呂は出掛けて行って神宮に着きました。大神は「わが国家は開闢より君臣の秩序は定まっている。臣下を君主とすることは未だかつてなかったことだ。天つ日嗣（皇位）には必ず皇統の人を立てよ。無道の人を早く払い除けよ」と託宣します。清麻呂は帰京して神のお告げのままに天皇に奏上しました。道鏡は大いに怒り、清麻呂を因幡員外介に左遷しますが、称徳は更に官位を剥奪して大隅国へ配流しました。

気落ちした称徳帝は翌年（770）3月に発病し8月に崩御されます。称徳は生涯独身でしたから後継者が無く、高官が集まって評議し左大臣藤原永手・藤原宿奈麻呂・藤原百川などが中納言白壁王を推して光仁天皇が誕生することになります。藤永手は称徳の遺詔を読み上げて先帝の遺志であるとして白壁王を推したのですが、この遺詔は偽造されたものだったと後に判明しました。道鏡は間もなく失脚して下野国薬師寺別当に左遷されてしまいます。

## ② 光仁天皇

白壁王は天智天皇の皇子である施基皇子の子で母は紀椽姫です。奈良時代の天皇とは異なって、天智の血を受け継いではいても天武とは全く関わりを持ちません。天智と越君娘との間に生まれたのが施基皇子ですから、施基皇子は元々皇統を嗣ぐには縁遠い存在だったでしょう。その子ですからますます皇統から遠いのですが、聖武の子である井上内親王と縁を結びました。井上内親王は県犬飼広刀自を母としていますので、藤原不比等の娘光明子を母とする称徳とは異母姉妹になります。これこそ権力闘争の恰好の相手となるわけですから、その井上内親王を妻とした白壁王は一つ間違えれば抹殺されるべき人物と見られる可能性を持っていました。そこで白壁王は酒に溺れて無能者の振りをして過ごしていたと言われます。

そこへ白羽の矢が立ったのです。永手の策謀もありましたが、井上内親王はれっきとした聖武帝の子であり、また白壁王との間に他戸王が生まれていて皇統を嗣ぐ最右翼と考えられるのですから、納得のいく人選でもありました。和銅2年（709）年に生まれた白壁王が即位したのは770年ですから既に60歳を過ぎてからの皇位継承でした。そして天武とは全く関係のない光仁天皇の即位は、皇位がここで天武系から天智系へ移ったものと見られています。

光仁帝は皇位につくと井上内親王を皇后に、他戸王を皇太子に立てました。永手が他戸王を白壁王の後継と考えたかどうかは分かりませんが、光仁の大きな後ろ盾であった永手は、天皇即位の翌

年宝亀2年（771）に急死してしまいます。道鏡を失墜させるために和氣清麻呂の背後で活躍した藤原百川は永手の弟ですが、かねてより光仁帝の妃高野新笠が生んだ山部親王の才能を認めていました。高野新笠は百濟第25代王武寧王の子孫である和乙繼の娘ですから、山部親王には百濟の血が入っています。その親王を皇太子にするべく百川は暗躍します。そして井上皇后が天皇を呪い殺そうとしていると密告しました。皇后には不利な材料が出てきたこともあって、光仁は皇后と皇太子を大和国宇智郡に幽閉します。そして3年後に2人は殺害されてしまいました。この事件には黒幕がいて、それは永手や百川の藤原式家ではなく北家の藤原良繼であったと見られています。

他戸王に代わって山部親王が皇太子に推戴されます。

### ③ 桓武の登場



桓武天皇像（延暦寺蔵）

光仁天皇は皇后の反逆や陸奥国蝦夷の地で起こった伊治公皆麻呂の反乱に心を痛み、老体を持ちこたえることが出来ずに、皇太子山部親王に譲位されます。781年のことで親王は既に40歳を超えて働き盛りであり、皇太子の8年間父光仁を補佐して活躍してきたこともあって、諸官からの信頼は厚いものがありました。

しかし、聖武帝につながる氏族の不気味な動きは続きました。即位の翌年（782）、大和乙人という者が武器を持って宮中に闖入しましたが捕らえられました。尋問を受けた乙人は、主人の氷上河繼が一味を集めて皇居に押し入り、朝廷を倒そうとしていると語りました。川繼は逃げましたが逮捕され伊豆に流されました。川繼は、聖武の娘不破内親王を母とし天武の孫の塩焼王を父としていて、父母共に正統な血筋である自分こそ天皇に相応しい身分であると考えたのでしょう。桓武帝は川繼の動きを早くから警戒していましたが、高官の中にも同調者がいたようで、参議藤原浜成（京家）や魚名（式家）が追求を受けて失脚しています。

光仁天皇は藤原永手が亡くなる直前に交野に行幸されました。山部親王も同行されたのではないのでしょうか。この時、百濟樂の奏者正六位村上造大宝に外従五位下を授けられています。恐らく交野において百濟王一族が歓迎の宴を持ち百濟樂を奏上したのでしょう。高齢の大宝を優遇したと続日本紀に書かれています。後に桓武天皇と百濟王明信の濃密となる関係の発端がこの時にあったという見方がありますが、推測の範囲を出ないとしても架空の話でもないように思われます。

### （2）長岡京

桓武天皇は即位して数年後の784年に都を長岡京に移しますから、奈良時代最後の天皇ということになります。平城京は一時聖武が恭仁宮・難波宮などに都を移したことがありましたが、710年に始まって74年間の歴史を閉じました。

### ① 遷都の理由

光仁時代に起こった陸奥国の蝦夷の反乱は、桓武にとって解決すべき一大問題でした。それと同時に天皇の頭に遷都のことが浮かんだと思われまます。伊治公皆麻呂が朝廷に反旗をひるがえし、蝦夷の諸集団がこれに呼応して朝廷側の柵を陥れ、持節征東大使藤原小黒麻呂や陸奥鎮守府副將軍百濟王俊哲らは大いに苦戦していました。そうした中で皇位に着いた桓武は、その戦乱打開に心穏や



かでないものがありました。軍事費や物資の調達と、遠征軍の整備は不可欠のことで、そのためには人心の一新が必要でした。

天智帝の不改常典の心を引き継いで皇位継承を正当化した桓武は、半島への進撃を試みたり近江への遷都を敢行した天智にならって平城京からの脱出を図ります。桓武に遷都を促したのは藤原百川の甥の種継でしたが、彼は百川と同じように機略に富み行動力のある人物でした。天智を遷都に導いたのには幾つかの理由が考えられるでしょう。

まず、平城京は70年余の歳月を経て公害に悩むようになっていました。現代のように汚物やゴミの処理が適切に行われることなく、人口の集中する都は不衛生な状態になっていました。そこへ大仏建立が行われましたから、金鍍金のための水銀が多量に使われて川はその水銀で汚染され、その影響は計り知れないものがありました。天皇が代わる毎に新しい宮を造営するのは、このような公害から逃れることも理由だったのです。

聖武帝をはじめ朝廷が仏教を奨励したために、僧侶がはびこって政治にも口を出し道鏡のような事件も起こりましたが、これは氷山の一角で政治上の大きな悪弊となっていました。寺を奈良に残して脱出することも考えられたと思います。何よりも聖武帝以後の度重なる政治上の混乱は、浄化を図らなければならない課題でした。種継が遷都を促したのもこれが最大の問題だったでしょう。



桓武天皇は生涯亡霊に悩まされました。井上皇后や他戸皇太子が殺害されたのは、自らが皇位を継ぐために行われた策謀によるものでした。その記憶の生々しい平城京から逃れたいというのは桓武の強い願望だったでしょう。後に実弟の早良親王を死に追いやっていますが、その怨霊に悩まされ続け崇道天皇の称号を贈ったりしていますから、井上皇后・他戸皇太子の怨霊にも大いに悩まされたと思われます。

そして対蝦夷戦争の物資調達には交通の便の良い淀川流域が適地でした。そこはまた軍事行動のためにも適切な場所でした。ここは西国道や丹波道への分岐点であり、巨椋池・山科・琵琶湖通って北陸道・東山道・東海道へと通じる要衝の地であり、淀川の右岸に位置して、平城京からは奈良山を越え木津川を下って淀川に合流する地点の対岸に位置し、そこには秦氏が拓いた葛野(太秦)の地を貫流する桂川が流れ込んでいて、洪水さえなければ淀川水域でも最も便利のよい場所だったのです。続日本紀の延暦6年(787)10月8日の記事には、桓武が詔した中に「朕は、水陸交通の便利を考えて、都をこの長岡村に遷した…」とあり、また延暦7年(788)9月26日の詔の中にも「朕は微小な身でありながらも、おそれ多くも帝王の大業を継承し、水陸に便利な長岡の地に都を建てている。」と述べられていて、水陸交通の便が強調されています。

この長岡を推薦したのは藤原種継の母は秦氏の出身でした。桓武も種継も共に百済につながる母を持っていたところからかねてより親密な関係があり、この地に対する認識で一致していたものと思われる。そして桓武は種継をはじめ佐伯今毛人・紀船守らを造長岡宮使に任命し、784年6月都城の建設に着手させました。桓武がそこに移ったのは11月のことでした。

種継は藤原式家に属していて桓武天皇実現のために力を尽くした百川の甥に当たります。このようにして藤原式家は桓武帝の覚え目出度い家系となりました。

## ② 藤原三家

飛鳥時代から奈良時代に朝廷の中枢に食い込んだ藤原不比等は、その娘宮子を文武帝の妃として聖武帝を生み、その聖武帝の皇后にはやはり娘の安宿姫(光明子)を送り込み、天皇家の外戚としての地位を確立しました。不比等は男子も生んでいてそれぞれ高官に付けます。4人の男子がおり

ましたが、それぞれを藤原四家と呼んでいます。武智麻呂（南家）・房前（北家）・宇合（式家）・麻呂（京家）ですが、麻呂の母が五百重姫であるのに対して他の3人の母は蘇我娼子です。この3人の家系である南家・北家・式家を藤原三家と呼んでいます。

京家は麻呂の子の参議浜成が氷上川継事件に連座して追放され滅亡してしまいます。北家の魚名もこの事件後は政界から名を消していますので、同じく追放されたと考えられています。南家は武智麻呂の子の仲麻呂が淳仁天皇を担いで一時は権勢を欲しいままにしましたが、道鏡事件を切っ掛けに失脚してからは兄の豊成も謹慎して表に出ませんでした。豊成の誠実さのお陰で南家は復活しその子継縄は中納言となり、蝦夷征伐の征東大使に任じられて陸奥に赴いています。継縄は後で百濟王明信の夫として登場します。

このような状況の中で、式家は良継・百川が桓武の皇位継承に大きな力を発揮して昇進し、良継の娘乙牟漏は山部皇太子の夫人となり、その即位と共に皇后になりました。百川の娘旅子も桓武の夫人となります。なお、南家の右大臣是公の娘吉子もまた桓武の夫人となります。しかし桓武の崩御後平城天皇の頃に吉子・伊予親王が失脚して、南家は衰亡してしまいます。この南家の失墜によって百濟王家も運命を共にすることになるのですが、これについては第6部で詳しく述べてみたいと思います。

式家は桓武に皇后と夫人を出し、その皇子が平城天皇・嵯峨天皇・淳和天皇と相次いで皇位を継承して権勢を誇りましたが、平城は菓子に溺れて皇位を嵯峨に取って代われ、嵯峨は藤原家とは関係のない橘嘉智子を皇后として仁明天皇を生んでいます。それぞれの帝に適当な女性を送ることが出来なかったのは式家の不幸と言えるかもしれませんが、式家の権勢はその時点で失墜したと言えるでしょう。

ここに登場したのが北家の冬継・良房親子でした。冬嗣の娘で良房の妹の順子を仁明帝の妃に送り込みます。そして良房の娘明子を仁明の子の文武に送り込んでいます。適当な女子を得たラッキーさがあったとしても、天皇家の外戚としての地位を再構築し、一度後退していた北家を隆盛に導いたのは冬嗣・良房の功績でした。こうして式家・南家が失墜していく一方で、北家は「月の欠けることがない」という繁栄の道を築いて行くことになります。

なお、この間の系図を「天皇と藤原三家」としてまとめ、末尾に掲載していますので参考にご覧ください。

### ③ 種継暗殺と早良親王

785年8月末に桓武は元の平城京へ行幸しますが、その留守中に藤原種継が何者かの矢を受けて暗殺されるという事件が起こります。この凶報を聞いた桓武は急ぎ新都に帰りますが、種継が息を引き取った後でした。下手人は衛府の舎人でしたが、大伴継人・大伴竹良とその徒党数十人を捕らえて取り調べをしたところ罪を認めたので、すべて斬首または配流としました。大伴氏が藤原氏の台頭を快からず思っており帝の留守をねらって犯行に及んだものでした。取り調べに対して左少弁大伴継人は大一族の総領であった家持の関与を仄めかしたところから、当時持節征東大使として陸奥国で蝦夷討伐に当たっていた家持も処罰されています。家持はその時既に死亡していたのですが・・・。

家持が関与したというので、皇太子早良親王も事件に関わったとして身柄を春宮から乙訓寺に移されました。早良親王は春宮太夫を兼務していた家持と親しかったところから嫌疑を掛けられたのでした。これを否定した親王は、身の証を立てるために十余日間に亘って飲食を絶ちました。しかし桓武帝は親王を淡路に移送することにし宮内卿らを派遣します。しかし親王は移送途中で衰弱のため死亡してしまいました。桓武には乙牟漏皇后との間に安殿（アデ）親王がおり10歳を過ぎていました。帝としてはわが子に皇位を譲りたかったでしょう。そのためには早良親王の存在が邪魔だったのです。桓武が恐らく早良親王の無実を知りながらも淡路へ送ろうとした背景には、皇太子

問題があったものと推測されます。

#### ④ 天帝を祀る

こうして桓武は11月25日に詔して安殿親王を皇太子に立てますが、その直前の11月10日に交野の柏原で天帝を祀りました。前々から行ってきた祈願に対するお礼として行ったと続日本紀に書かれています。前々から行ってきた祈願とはやはり皇太子問題に対するものではなかったでしょうか。安殿親王を皇太子に立てることは桓武にとって大きな念願でした。そのために天帝と先帝の光仁に対して、その処し方について絶えず祈っていたものと思われます。それが種継暗殺問題に引っ掛けて解決したのですから、お礼の祈願を行ったというのでしょうか。

さて、この交野の柏原とは何処でしょうか。現在柏原という地名は交野に存在しないのですが、枚方市片鉾本町の杉ヶ本神社が所在するところ、または継体大王が即位した樟葉宮跡あたりではないかと言われています。天帝を祀るのは中国唐の行事で、都の真南の郊外に天壇（郊祀壇）を築いて天の神を祀りますが、桓武はこれを踏襲して行ったのでした。この行事は延暦6年（787）11月5日にも行われました。この時の祭文には次のように書かれていて、桓武の代理として藤原継縄が祭文を言上したことが分かります。



杉ヶ本神社

「ここに延暦六年丁卯の年、十一月の朔が庚戌に当たる甲寅の日（5日）に、跡嗣ぎの天子であるわたくしが、謹んで従二位・行大納言兼民部卿・造東大寺司長官の藤原朝臣継縄を遣わして、あえて明らかに昊天上帝に申し上げます。わたくしはうやうやしく昊天上帝の情け深い仰せをうけて皇位を継ぎ守ってまいりました。幸いにも天は祥瑞をあらわし、万物を覆い育ててその証を示され、世の中は安らかで落ち着き、すべての民も和らぎ楽しんで暮らしています。まさに今、太陽が最も南に達して、長い影が初めて伸びてここにうやうやしく燔祀の儀式を行い、謹んで天の徳に報いる式典を行います。謹んで玉や絹、いけにえの肉、器に盛った穀物などの品々を揃え、以て天帝の祀りに備え、謹んで高潔な誠の心を捧げます。高紹天皇（光仁）を昊天上帝に合祀して祀ります。どうか受けてくださいますように。」

これは唐の皇帝の祭文を模して作られたものですが、唐では天帝に太祖景皇帝を合祀するところを桓武は父の高紹天皇（光仁）を合祀しています。ということは、光仁こそ新しい王朝の祖であると言っているのであって、奈良時代に続いた天武の血筋を引く王朝に対して、天智につながる新しい王朝が光仁から始まったというわけです。もっとも桓武が皇位に着いた当初からその考えていたのではなさそうです。母の高野新笠は和氏の出身ですから元は和新笠でした。光仁の前の孝謙（称徳）天皇は高野山陵に埋葬されたところから、高野天皇とも呼ばれました。桓武（山部親王）は立太子したときに母をこの高野を戴いて高野新笠としたのです。聖武からの継承者ということ意識していたことはこのことから見ても確かでしょう。何故天武系を捨てたか、井上内親王事件の影響が強かったのではないのでしょうか。

桓武はこの少し前の8月24日に藤原継縄の邸宅に立ち寄って、継縄の正室で正四位上の百済王明信に従三位を授け、直前の10月17日に交野に行幸し鷹を放って遊獵され、継縄の別荘を行宮とされました。即ちここにしばらく滞在されたのです。10月20日には継縄が百済王氏らを率いて種々の百済楽を演奏させています。桓武にとって交野は馴染み深い地となりました。